

中学校音楽科における日本の楽器の指導

- 篠笛とお囃子の指導を通して -

所属校：立川市立立川第六中学校

氏名：森 由紀乃

派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：日本の音・音楽，日本の楽器の指導，篠笛と江戸祭囃子

研究の目的

音楽は、それぞれの地域や民族によってさまざまな特質をもつ。それは各地域の気候風土と、そこでの生活から自ずと培われた民族性によってはぐくまれてきたものである。日本もさまざまな固有の音楽をもつが、学校における学習の場面では、それらが子供たちにとってあまり身近なものではないように思われてきた。

しかし実際には“伝統的な日本の音楽”は、今でも子供も含めた私たちの身のまわりにあふれている。当然のことながら、日本人としての感性は、日本人の歴史と生活によって培われてきたものである。同様に、日本人の歴史と生活によって育まれてきた“日本の伝統的な音楽”は、日本人としての感性にフィットしたものである。そのため日本人の多くは、日本の音楽に対して「これが日本の音楽だ」などとは、意識していないのではないかと考える。そこで、「日本人の中に縷々として受け継がれている日本人としての感性を、中学校における日本の音楽の学びを通して捉えなおすことにより、子供は自国の文化をより深く理解することができる。日本の音・音楽を自らの文化として実感するために、篠笛や祭囃子などの子供に比較的身近な音楽を自ら演奏することが有効であろう。」という仮説をたてた。この仮説に基づき、日本の音・音楽の特質と教育的意義、日本の伝統芸能の学習法とその応用、篠笛と江戸祭囃子の指導について考察及び検証する。

祭囃子は、日本のさまざまな音楽の中でも歌を伴わない器楽曲として異色ではあるが、現代の日本人にとっても中学生にとっても比較的身近なものである。また、祭囃子は、器楽としてアンサンブルの楽しさを味わいながら協同的な学習を進めることができ、創作活動など器楽以外の領域への展開も可能である。そのため、日本の楽器の授業を発展させる上で多くの可能性をもつ教材であると考えられる。

以上のような考えに基づき、日本の楽器の指導を中学校3年間の指導計画に位置づけ、器楽領域における日本の楽器の指導と生徒の変容について考察・検証するとともに、新たな篠笛と江戸祭囃子の授業について検証および提案することを、本研究の目的とする。

研究の方法

本研究では、(1) 日本の音楽の特質と伝承 (2) 日本の音楽の指導 の2項目を大きな柱とし、日本の音・音楽と日本の楽器の指導について考察する。

そこでまず、文献研究により 日本の音楽の諸要素と特質 日本の音楽の成立過程（特に江戸祭囃子の発祥と伝承）について明らかにする。さらに、学習指導要領の変遷、中学生と地域・社会との関係からみた日本の音楽の教育的意義 日本の伝統芸能における学習法と中学校音楽科授業への応用について考察し、日本の音・音楽と日本の楽器の指導についてその方向性を示す。また、具体的な指導の在り方として、篠笛の授業の検証を行うとともに、江戸祭囃子の教材化に関する提案を行う。

研究の結果

1 日本の音楽のあらまし、日本の音楽の教育的意義、日本の伝統芸能の学習法と学校音楽教育について (1) 日本の音楽のあらましとして、日本の音・音楽の特質と江戸祭囃子の発祥及び伝承について文献研究を行った。日本の音・音楽のさまざまな特質の中から、まず音律と音色に着目し、検証授業を行うこととした。(2) 日本の音楽の教育的意義について、中学校学習指導要領における日本の音楽、中学生と地域・社会との関係から見た日本の音楽について考察した。

現代の子供たちも日本の風土とそこでの生活によって育まれた日本人の日本の音楽に対する感性を十分に受け継いでいる。日本の音楽を学校教育で取り上げ、「日本の音・音楽」に改めて意識を向けることにより、日本人の感性を理解し尊重できるようになった生徒は、さらに他の民族のさまざまな音楽に触れたときも、「日本の音・音楽」の特質と日本人の感性を理解したときと同じ手順でそれぞれの民族性に対する理解と尊重ができるようになるであろう。

(3) 日本の伝統芸能の学習法と学校教育との接点について、文献研究及び調査取材研究を行った。

能楽の世界における師匠と弟子の関係、八重山古典民謡研究所での指導の工夫や取材対象校A小学校の児童たちの学びの様子から、これまでの自らの授業のいくつかのポイントに関して、その有効性の裏付けを得るとともに新たな示唆を得ることができた。八重山古

典民謡の師匠は、自らの音・音楽と音楽に対する考えを弟子たちに伝えるため、さまざまな方法を模索しておられた。また、A小学校の児童は、体験の中から表現のあるべき姿に自ら気づき、音楽性を豊かにしていた。これらの研究成果は、今後自らの授業改善を進めていく上での発想の根幹となるものである。

2 検証授業等を通して生徒の変容から見た授業の有効性についての考察と江戸祭囃子の教材化の提案

(1) 日本の音楽の特質の中から、特に音律に焦点を当てた授業を実践し、検証した。

この授業の中で、古典調の篠笛で吹く『江戸子守唄』を聴いた生徒の多くが、「懐かしい感じがする」「和を感じる」という感想を述べた。この検証を通して、生徒は日本の音・音楽の特質を学び理解することで、日本の音・音楽のもつ情趣をより深く味わうことができるようになるということが明らかとなった。

(2) 評価機能から見た指導形態の工夫という観点で、平成14年度に東京都教育研究員として検証を行った日本の楽器の指導方法(グループ学習、ペア学習)についてあらためて考察するとともに、新たな指導形態(師範代システム)の提案を行った。

日本の音楽の学びにおける師匠と弟子の関係に近い機能を中学校音楽科の授業においても再現することのできるペア学習は、楽器の技能習得にかかわる授業において特に有効である。また、師範代システムは生徒同士の学び合いを発展させ深めることのできる形態として、広く活用できるものと考えている。

(3) 篠笛の授業をさらに発展させるための一つの提案として、江戸祭囃子の教材化について述べた。また、日本の楽器の指導としての篠笛と江戸祭囃子の授業計画について、具体的に年間学習指導計画を例示することで提案した。

篠笛の技能習得には或る程度の時間が必要である。他領域の学習とのバランスを考えたとき、必修授業のみで篠笛の演奏形態を発展させていくことは難しい。そこで前述の師範代システムを活用するとともに、選択授業との連携を図ることにより、篠笛の独奏から江戸祭囃子の合奏へと発展させることが可能となってくるであろう。

考察

(1) 音楽科教師の役割

日本の音・音楽について、また中学校において日本の伝統音楽や民俗音楽を学習することの意義や方法についての研究を行ってきたが、現在音楽科として教職に就いているわれわれの多くが、学生時代に日本の音楽を学んできてはいない。教師は、今まさに自ら日本

の音楽・日本の楽器を学びつつ授業を行っている。日本の伝統芸能は、いつまでも学び続け、一生をかけて精進していくものである。よって、教師が学ぼうという意志をもち、学び続ける限り、今からでも遅くはないはずである。まずは音楽科教師が、より一層日本の音・音楽に対する理解を深めることが重要であろう。

(2) 実体験として日本の音・音楽に触れる機会の充実

現代の中学生が今なお日本の音・音楽に対する感性を持ち続け、日本の楽器と日本の音律によって演奏される曲の情趣を聴き取り、日本の音・音楽としての価値を判断できるということが一層明確となった。しかし、身近な地域・社会の中で日本の音・音楽に直接多く触れることのできる生徒は、すべてではないという現実がある。そのため、生徒が自国の文化としての日本の音・音楽の価値を判断し、より深く学ぼうとしたとき、学校教育における日本の音・音楽の指導の在り方が問われることとなる。だからこそ、音楽科の授業においては、日本の楽器の演奏を通し、実体験として日本の音・音楽に多く触れる機会を計画的に設定することが重要である。そのことにより、生徒は日本の音・音楽に対する感性をより一層膨らませることができるからである。中学校において日本の音・音楽を取り上げることにより、生徒は、日本の音・音楽に対する意識をはっきりと持つことができるようになる。そのことが、日本人としての感性を呼び覚まし、さらに豊かにし、自国の文化をより深く理解することにつながる。

(3) 伝統的な歌唱等の指導に関する課題

日本の音・音楽への関わりについては、小学校との連携を図っていくことも重要であろう。幼・小学校期から充実させることによって、中学校での学びが質的に深まることが期待できるからである。新しい学習指導要領案においても音楽科として特に重点的な課題としなければならないのは「伝統や文化に関する教育の充実」という理念である。音楽科教師は、より一層日本の音・音楽の指導を充実し発展させていかなければならない。特に、日本の伝統的な歌唱の指導については、楽器の指導に比較して研究がやや遅れているという現実がある。日本の楽器以上に多様な日本の伝統的な歌唱について、さらに研究を進めていくことが、今後の課題である。また広く目を転じれば、家庭や社会が日本の音・音楽への関心と理解を一層深めることも、子供の学びの質を高め、子供がごく自然に日本の音・音楽を享受し、生涯にわたって愛好していくことの土台として必要不可欠であろう。このように社会全体が、日本の音・音楽を真に価値あるものとして評価することが、望まれるのである。